

六月九日

午前中は世田谷村で小休する予定。少し大きめの寺院を手掛けたいな。

十三時過大学。演習G（Gスタジオ）は休ませてもらう。渋谷の杉浦康平先生のアトリ工訪問の予定を三〇分早めていただく。

このところ休みが全く無く、いささか頭も体も浮遊している。石井和紘氏より拾庵茶会の便りいただく。勤の良い人だから、このいささか過剰な石井流メディアデザインの方法がどう展開されてゆくのか、キチンと見届けたいと思う。基本的には私のネットを軸にしたメディアデザインの考え方と同じ事が考えられているようだ。遊びの中に現代の骨格を見てゆこうとしているのだ。石井さんからうかがった話で面白かったのはある大会社の社長さんに通信を出したら、社長に届く迄に数十名の社員の眼に触れるように、葉書は一人一枚の効果以上のモノがあるようだという話で、誠に石井流である。それに葉書だと受け取った方も簡単には悪いような気がしてすぐには捨てないでしようとも言ったな。確かにそつで、そう言われてしまったら仲々、捨てられないのである。拾庵主の哲学か。

十五時半杉浦庸平事務所。李祖原と。案の定、杉浦庸平氏と李は大筋で同波長であった。杉浦さんは李のこれ迄のプロジェクトに仰天。しかし、リベスキンドのデザインの傾向と李のシンボリズムミックスタイルは本当は同じ傾向、趣向のもので、リベスキンドのものはシリアスな解体を象徴し、李のものは楽天的に

人々を幸福にすると、マア、アツサリと言ひ抜いた。やっぱり杉浦さんはダテや酔狂の人じゃない。同時に李がインスピレーションを頼りに、身体で今のデザイン傾向を推し進めてきた事も見抜かれた。会談中、昨日会った馬場昭道から杉浦さんのところに電話があり、アメリカのTV番組にケネス田中のインタビュアーで李を出せないかとの事。李は俺はTVは余り好きじゃないし、危険だの意見の所有者である。私も同じ、TV出るバカ、出ないバカという感じだよね。アメリカのTVはチョツと危険だろう。特にブツティストとして出るのは危ない。アメリカの多くの人にislamと仏教の違いが解るわけないもないだろう。十七時半、新大久保駅近江屋でビール飲みながら、東北の結城登美雄氏を待つ。隣の座席でオジさん達が昨日のサッカー・ワールド・カップ北朝鮮戦の話題を続けている。聞くまでもなく聞いていると、実に水準の高いどうでも良い内容の会話で驚く。おそらくは、もう会社づとめもリタイアした人達なのだろうが、枯れていて、仲々良い。希望も無いけれど。しばし後、結城氏、農文協甲斐良治氏来。結城さんは汽車の都合で二十一時前退出。その後甲斐氏とダリアの花に関して話し合う。この人、仲々めげない人で手こずる。再会を約して散会二十二時頃。スコットランド民謡と、日本の農家の庭の千草に関して、少し再び調べなくてはならぬ。彼はスコットランドの庭園は日本から輸出されたものだと言い張り、私は英国から花も唄も輸入されたと言い張った。私の方が正しいと思うが調べたい。日本の唱歌に代表される近代日本の抒情の素の風景のルーツを研究するのは面白いことだとは思うのだが、時間が無い。二十三時頃世田谷村に戻る。